慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　1回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時　午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

第118回医師国家試験

コロナの影響を受けながら合格に向けて奮闘した6年生

令和6年2月3日、4日に実施された第118回医師国家試験の合格発表が、3月15日に厚生労働省より行われた。

第118回医師国家試験の受験者総数は1万0614人（昨年1万0293人）、合格者は9547人（昨年9432人）で全体の合格率は92・4％（昨年91・6％）であり、昨年と0・8％合格率があがった。

合格基準は、①必修問題160点以上／200点、②一般および臨床実地問題76・6％（230点以上／300点、昨年は74・6％）③禁忌肢3問以下であった。

今年の問題は、解いてみると標準的で臨床実習の現場で習うような内容が中心となって良問であるという印象を受けた。しかし、その分、平均得点が高くなり、合格率を上げても、合格最低点が上昇してしまったと考えられる。私は、毎年、試験会場に足を運び、受験生を応援しているが、今年は全員が帝京平成大学中野キャンパスでの受験であった。

慶應義塾大学の現役生は111名のうち110名が受験し、108名が合格、2名が不合格であった（合格率98・2％）。既卒生は3名が受験したが、合格者はなかった。

現在の6年生は、新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けた学年である。研修医になって、彼らが大きく飛躍することを願っている。

（医学教育統轄センター　門川俊明　70回）

慶應義塾大学の合格者数推移

年次		新卒合格者数	新卒合格率	既卒合格者数	既卒合格率
2024年	118回	108/110	98.2%	0/3	0%
2023年	117回	112/113	99.1%	1/4	25%
2022年	116回	109/110	99.1%	2/5	40%
2021年	115回	108/110	98.2%	2/5	40%
2020年	114回	106/107	99.1%	4/8	50%
2019年	113回	107/111	96.7%	2/4	50%
2018年	112回	110/110	100%	2/6	33.3%
2017年	111回	107/110	97.3%	2/4	50%
2016年	110回	105/108	97.2%	0/4	0%
2015年	109回	108/108	100%	2/9	22.2%

令和5年度卒業式

医学部111名が社会へとはばたく

3月25日、日吉記念館にて令和5年度卒業式が行われた。新型コロナウイルスの影響で午前の部と午後の部の2部制で開催されていた昨年度までとは異なり、本年度は計6151名の卒業生が一堂に会することができた。

塾歌斉唱より始まった式典では、まず松浦良充常任理事による学事報告がなされ、各学部の卒業生数および表彰者数が読み上げられた。令和5年度の合計卒業者数は合計6151人、うち医学部の卒業生数は111名であった。次に各学部の代表者への学位記授与と各種表彰が行われ、大学表彰規程による表彰、すなわち医学部首席として志賀美智子君が表彰を受けた。続いて、小泉体育努力賞、小泉体育奨励賞や塾長奨励賞の表彰も行われた。

各種表彰の終了後、伊藤公平塾長が式辞を述べた。塾長は、冒頭で慶應義塾の目的について言及した後、独立自尊の精神を持つ先導者となるためには「連帯」が重要であると語った。ニューヨークタイムズ誌の記者であるトーマス・フリードマンは、彼の記者歴の中で最も嬉しかった世界で起こった出来事として欧州連合EUの発足を挙げたという。EUは、加盟国間での経済・通貨の統合、交通外交・安全保障政策の実施などの不可能と思われた策を実現した先導者的存在である。塾長は、分断の時代を迎えている今こそこうした連帯が求められると強調した。また、トーマス・フリードマンが最も残念だった出来事として挙げたのはマングローブの破壊である。マングローブには多様な生物が生息しており、陸と海の間に位置する緩衝地帯としての役割を果たしている。この緩衝地帯の消失は学術界における異分野間の連携不足や戦争という形でも発生していると塾長は語った。その上で、気心知れた仲間間で行われる「人間（にんげん）交際」の枠を超えた知らないグループ間での交際、「人間（じんかん）交際」を行うことが有機的な結びつきを持つ社会の形成につながると述べた。

次いで、楽天株式会社の前身である株式会社エム・ディー・エムを創業し、現在は楽天グループ株式会社でチーフ・ウェルビーイング・オフィサーを務める小林正忠氏から塾員代表として祝辞があった。これに続き、経済学部の鄭怡然君が卒業生代表として登壇し、社会に出る上での決意や支えてくれた方々への感謝の気持ちを語った。式の後半には、卒業25周年を迎えられた1999年三田会より寄付目録贈呈及びご挨拶があり、その後2024年三田会の結成式が行われた。結びには、会場にいる塾職員と卒業生など、慶應社中による慶應讃歌斉唱が行われ、無事閉式となった。

卒業式に続いて、学部ごとに学位授与式が行われ、三四会より医学部の卒業生に記念品が贈呈された。学位記を手にした卒業生たちは、会場近くで仲間や家族との写真撮影や思い出話を楽しんでいた。4月から新たな人生のステージに立つ彼らの表情からは、社会へはばたいていく活力が感じられた。

（4年　浅井隆徳、1年　永田みのり）

日吉記念館での卒業式

祝辞を述べる小林正忠氏（楽天グループ常務執行役員 チーフ・ウェルビーイング・オフィサー）

晴れやかな表情の卒業生たち

慶應社中による慶應讃歌斉唱

第132回生涯教育研修セミナー開催

『新しい予防医療 ―より早期の発見と治療を目指して―』

予防医療センター　高石　官均（69回）

2024年2月10日に、第132回生涯教育研修セミナー『新しい予防医療―より早期の発見と治療を目指して―』が、経団連会館国際会議場現地とオンラインのハイブリッド形式で開催されました。セミナーの開会にあたり、医学部長・慶應医学会会長の金井隆典先生からビデオメッセージを、三四会会長の武田純三先生からは現地でご挨拶を頂きました。

2023年11月に、新たな予防医療・ウェルネスサービスの社会実装と、産学協働の推進力となる人材の育成を目指し、慶應義塾大学予防医療センターが、麻布台ヒルズに拡張・移転しました。慶應義塾大学初代医学部長・病院長である北里柴三郎先生は、「摂生は本にして治療は末なり」と予防医学を重視しました。将来起こりやすい病気を、発症前の未病の状態で診断・予測し、予見的な介入を行う医療は「先制医療」と呼ばれており、予防医療センターでは、「先制医療」による積極的な攻めの予防医療へのシフトを図っています。そこで本セミナーでは、独創的な発想による最先端医療を牽引している、3人の先導者をお招きしました。

第1席目は、伊東大介先生（生理学特任教授71回）から、「アルツハイマー病（AD）新規治療薬の現状と認知症先制医療への展開」と題して、早期ADを低侵襲で簡便かつ正確に診断する方法の開発と、プロテオーム解析の機械学習によるAD病理の予測モデルの構築について講演頂きました。つぎに、陣崎雅弘先生（放射線科学・診断教授　66回）から、「立位CTの開発と導入―健康長寿のための身体的フレイルの早期診断―」と題して、世界初の立位CTの開発者として、日常を過ごす立った状態での身体機能評価を可能にし、健康長寿に貢献する立位CTの有用性についてご講演頂きました。最後に、西原広史先生（臨床研究推進センター教授　74相当）より、「予防医療におけるがんゲノム検査の意義と今後の展開」と題して、予防医療分野におけるがんゲノム医療について、発症前からがんゲノム検査を導入することにより、がんゲノム医療が、がん治療全体を治療の最終ラインまでカバーする可能性についてご講演頂きました。

セミナーの閉会にあたり、共催頂きましたエーザイ株式会社代表執行役CEOの内藤晴夫様から、アルツハイマー型認知症に対する、疾患修飾薬の開発と展望についてお話し頂き、生涯教育研修セミナー委員会委員長・慶應医師会会長の佐々木淳一先生から閉会の辞を賜りました。ご講演頂きました三名の先生方、本学関係者の皆様、共催頂きましたエーザイ株式会社、またご参加、ご視聴下さいました先生方に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

第1席の伊東大介先生

第2席の陣崎雅弘先生

第3席の西原広史先生

司会進行の高石官均先生

令和5年度 謝恩会開催

令和5年度の謝恩会が3月25日、明治記念館蓬莱の間において執り行われた。今年度の卒業生である103回生が参列した。

謝恩会は19時30分に開会し、来賓の挨拶、卒業生紹介、卒業記念品授与、寄贈品贈呈、謝恩会委員挨拶、若き血斉唱と続いた。記念撮影の後は、卒業生が花道をつくり、医学部管弦楽団の演奏に合わせて、来賓の先生方が退場された。

来賓挨拶として、北川雄光常任理事、天谷雅行常任理事、菅沼安嬉子慶應連合三田会会長、松本守雄病院長、武田純三三四会会長、金井隆典医学部長からのお話があった。金井医学部長は、この節目の日に家族に感謝の気持ちを伝えることの重要性について言及した上で、様々な困難を乗り越え卒業の日を迎えられたことを称え、自ら乾杯の音頭をとった。

卒業生は、お世話になった先生方に感謝の意を述べたり、思い出話に花を咲かせたりなど、会は終始和やかな雰囲気で進行した。

103回生が卒業後も更なる飛躍を遂げ社会の先導者となることを願うとともに、我々在校生も義塾で学ぶ者としての自覚をより一層強く持ち、世界の医学の進歩に寄与できるように研鑽を積む必要があると強く感じた。

（4年　浅井隆徳、頃安美玲）

謝恩会の様子　花道をつくる卒業生

記念撮影

謝恩会会場の様子

三四会奨励賞の推薦について

Young Investigator Award, Keio University School of Medicine
Alumni Association（Sanshikai）

目的　若手の三四会会員の研究を奨励し、実学としての慶應医学の発展を図る。

対象　1．次の各分野で学位取得後地道に研究を続け、すぐれた業績をあげた三四会正会員で三四会員として少なくとも1年は経過している者（本塾関連病院のみではなく、研究施設、他大学、地域等で業績をあげている三四会員も含む）
対象となる分野
イ、臨床医学　　ロ、基礎医学
2．満40歳以下

推薦方法
1．推薦者は、三四会役員、三四会評議員、慶應義塾大学医学部教授、慶應義塾大学関連病院会会員および他大学教授（三四会員）とします。
2．推薦者は、候補者の承諾を得た上で、所定の書式（三四会奨励賞推薦状）により候補者を推薦して下さい。
3．推薦締切りは2024年4月12日(金)必着、三四会事務局宛とします。
4．提出書類は、推薦状、被推薦者略歴、業績目録、主論文一編の別刷（学術集会発表の場合はそれを証明するコピーと800字程度の抄録）、提出部数は、オリジナル1部とコピー10セットが必要です。
5．対象となる研究が共著論文の場合は共著者の承諾書（オリジナル1部とコピー10部）が必要となります。

※推薦状、略歴、業績目録、論文、共著者の承諾書を順に組んで1部とし、コピーも同じ体裁に整えてください。
※推薦状のダウンロード、必要書類等は下記URLをご覧下さい。
URL：https://www.sanshikai.jp/award/incentive

選考ならびに受賞
三四会奨励賞選考委員会による厳正な選考の結果、約8名程度の受賞者を決定します。受賞者は2024年6月15日(土)に予定されている三四会定例評議員会で表彰され、賞状および副賞が授与されます。

三四会社会功労賞の推薦について

目的　地域社会、社会貢献を通じて顕著な功績により三四会の名誉を高めた三四会員を表彰し実学としての慶應医学の発展を図る。

対象　1．表彰目的に沿った優れた業績をあげた三四会正会員（本塾関連病院のみではなく、研究施設、他大学、地域で業績をあげている三四会員も含む）
2．年齢は問わない。

推薦方法
1．推薦者は、三四会役員、三四会評議員、慶應義塾大学医学部教授、慶應義塾大学関連病院会会員および他大学教授（三四会員）とします。
2．推薦者は、候補者の承諾を得た上で、所定の書式（三四会社会功労賞推薦状）により候補者を推薦してください。
3．締め切りは、2024年4月12日(金)必着、三四会事務局宛とします。
4．提出部数は、推薦状、被推薦者略歴、表彰目的に沿った業績目録、客観的に評価しうる資料等、オリジナル1部とコピー10セットが必要です。

※推薦書のダウンロード、必要書類等は下記URLをご覧下さい。
URL：https://www.sanshikai.jp/award/distinguishedService

なお、社会功労賞は、年を重ね、業績を積むことにより、より事業に重みを増すものです。これまでに採択されなかった事業についても是非再度応募ください。

選考ならびに受賞
三四会長を委員長とする三四会社会功労賞選考委員会による厳正な選考の結果、原則1名の受賞者を決定します。受賞者は2024年6月15日(土)に予定されている三四会定例評議員会で表彰され，賞状および副賞が授与されます。

鑑賞知来

「travail」（フランス語：労働）という言葉はラテン語の「tripalium」に由来し、元来、人間を串刺しにする拷問の道具「三叉矛」を指していた。語源的には「労働」が過酷で苦しいものであったことを物語っている。また、聖書のキリスト教的な解釈によれば「労働」とは原罪の罰として与えられたものとされていた。しかし、ルネッサンス期ヨーロッパで芸術、科学、文学などの分野が大きく発展し、技術革新も相まって人々の意識が変化し、労働が負担や罰ではなく、むしろ創造性や成長の機会として捉えられるようになった。一方、同じ労働を意味する「labor」（ラテン語）は芸術家や職人の仕事を指し肯定的なニュアンスを持つ。

医療の現場では「labor」の比重が高いが、古典的な意味での「travail」も少なからず存在する。しかし、「labor」としての対価を得るには長い時間の訓練が必要である。すなわち我々が専門医と呼ばれるまでには、長期間の専門レーニングが必要となる。医師はその専門性の高さゆえ、長時間労働を強いられることは必然とも言える。従って、他職種で代替可能な「労働」を可及的に共有・委譲（タスクシフト・シェア）し、本来の「labor」に専念できる環境を整えることは、仕事の「やり甲斐」や労働時間短縮に有効な方策となる。また、「労働」の概念が変化したルネサンス期同様、最近の様々な分野での技術革新は目覚ましい。医療現場に、AIを用いた診断／治療や文書作成、遠隔診療や医療ロボットを用いた遠隔手術支援、生体センサーによる健康管理などの先進的な技術を取り入れることで労働効率が高まる。

一方、我々の意識の面でも、労働と休暇のバランスをとった働き方を優先することが当たり前となれば、社会の中での医師の在り方が変化する。今回導入される「医師の働き方改革」を活用し、医師の労働環境の改善のためにできることは多く存在すると考える。

（済生会宇都宮病院　副院長兼統括診療部長　篠崎浩治　68回）